
Midnight Mansion

ジャック・S・サンダース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M i d n i g h t M a n s i o n

【Nコード】

N 7 2 3 4 W

【作者名】

ジャック・S・サンダース

【あらすじ】

ある晴れた日の夜。

人里離れた薄暗い森の奥で、主人公のアルノーはひっそりと建つ一軒の古い邸宅を見付けた。

敷地内に教会も建っている等、豪華なその邸宅に主人公は興味をそそられるのだが――

（前書き）

警告

この小説には、死に纏わる内容が含まれています。

望月の照らし出す、薄暗い森と夜の獣道。この蟲とヤミカラスの啼き声が木霊する場所を超えると、頑丈な鉄の門や高い塀の向こうに、人知れず建つ一軒の邸宅が見えて来る。石造りのその邸宅は、かなりの年季が入っているらしく、遠目でも古ぼけているのが解った。

人を避け、ふらふらと彷徨ってあちこちを放浪する事幾年か。こんな森の奥にこんな邸宅があると気付いたのは、全くの偶然だった。茨の巻き付く石の塀越しに敷地の中を覗いてみると、人里離れた場所にも拘わらず、邸宅のいくつかの窓からは明かりが漏れて来ている。板を打ち付け封鎖された窓もかなりの数見受けられるが、中に誰か居るのは確かのようなのだ。また、この邸宅の正面向かって左手奥には、同じく石造りの教会が建っているのが見え、針の無い時計塔が月光を反射して輝いている。

この辺り一帯の領主の館だろうか。それとも、別荘か。いずれにしろ、富豪の持ち家なのは間違いなさそうだった。

「ネエ、ナニシテルノ？」

飛び上がるかと思った。音も無く、気配も無く、何時の間にか近寄って来ていた誰かの声が俺の真後ろから聞こえて来たのだから。振り返ると、俺の手が確実に届くような距離で、カゲボウズがピタリと張り付くように浮かんでいた。

何時の間に近寄って来たのか。それも気になるが、風も無いのはためくカゲボウズの身体には、口なんて見当たらない。一体何処から声を出したのだらう。俺はそう思いつつも、取り敢えず答えだけは返す事にした。

「何って、見てるだけだが？」

「へー」

返って来たのは、なんとも言えない感嘆詞一つのみ。どう捉えら

れたのか、正直理解に苦しむ。

その上、ここで会話が途切れたにも拘らず、カゲボウズは俺の手が届くような至近距離から離れようとしなかった。ただ俺の目の前でフワフワ浮かんだまま、真っ直ぐに俺を見据えて来るだけだ。

何か、薄気味悪いな、コイツ。何と無く冷や汗を掻きそうな気分になりながらも、俺も逆に奴の眼を見返してやる。

そう言えば、鏡以外でこうして誰かの目を至近距離からまじまじと見るのは、かなり久方振りの体験だ。このカゲボウズの持つ、水色の眼に黄色い瞳というのも中々綺麗なものだな。悪くない。

と、そう思った時だった。カゲボウズがゆっくりと俺から遠ざかり、そして十フィートばかりの距離を取った。

何故距離を取ったのだろう。俺はゴーストタイプのポケモンを喰う趣味は無いのだが。俺をからかうのに飽きたのだろうか。

「ヨル？」

数秒が経った後、カゲボウズがふと僅かに首を傾げながらそう訊いて来る。だが、俺がその意味を理解し、判断し、答えた時。カゲボウズは、恐らく俺の声は聞こえなかったに違いない。

俺が口を開いたとほぼ同時に、邸宅の敷地と外とを区切る門が、大きく軋む音を立てながら外に開かれたのだ。改めて門に目をやると、やはり鉄製だった。しかもかなり分厚く、1フィート程度はある。例え破城槌を持って来ても、そう簡単には破れないだろう。古びていても、なおそこそこの強度はありそうだ。これ位の門があれば、中の者はさぞ安心して眠れる事だろう。

「ヨッテッテヨ」

「金は持って無いぞ」

「イイヨ」

「招待って事なら、遠慮無く」

何処となく胡散臭い気がするが、俺にとっては所詮今更の話に過ぎない。別に何も怖がる事は無い。とつくの昔に手遅れなのだから俺はカゲボウズの提案に乗ると、そのまま門へと近付いた。その

俺の後を、カゲボウズがヒョコヒョコついて来る。本当はお前が先に入るところじゃないのか、と内心で突っ込みを入れつつも、俺は、護りの堅牢そうな邸宅の敷地内へとめでたく進入した。

邸宅を見上げると、やはり立派なものだった。あちこち傷んでいるのが玉に瑕だが、これ程の敷地に教会まで付いてるなら文句は無い。人里離れているが、今の俺にはそれは大した欠点では無い。正直この場で買い取りたいくらいだった。

「タブンミンナイエノナカニイルヨ」

ほうほう。カゲボウズの仲間がこの邸宅の中に。俺は少なくとも地上三階建てのこの邸宅を見上げ、ふっと笑みをこぼした。カゲボウズと暮らしていると言う事はゴースト好きなのだろう。好みのポケモン達に囲まれているとは幸せな奴め。とは言え、それなら俺の事も気に入ってくれそうだ。

俺は、正面に見える邸宅の玄関口を目指して進みだした。

ところが、何故か邸宅に近付けない。邸宅が逃げている、というわけでは無く、周囲の景色も全く変わらない。どうやら、俺が止まつてゐるらしい。おかしい。俺は移動の仕方を忘れる程ポケテは無いはずだ。

更に、どうも下から寒気が上って来る。確認の為に下を見ると、すぐに俺の影で何かが二つ、赤く光っている事に気付いた。というより、下に半月型の形と言い距離を開けて横に並んだ配置と言い、どうも眼光に見える。さらに、カゲボウズがクスクスと声を押し殺して晒う中、俺の影の目が瞬きし、そしてその少し下の部分が大きく横に裂けた。どうやら、嗤ってゐるらしい。あらら、カゲボウズの仲間か。というよりいきなり黒い眼差しで拘束ですか。サプライズな歓迎だ。

「人の影に潜って楽しいかい？」

「へっ、驚かねえのか」

「残念ながら」

影に潜んだ誰かさんに、俺は至極冷静に話し掛ける。

すると、俺の影がはあ、と肩を落とすような仕草をし、そして影からゆつくりと別の影が浮かび上がって来る。何だか平卵のような丸っぽい影に、短い手足。影に潜む特殊能力を持つ、シャドーポケモンのゲンガーだった。

「何の用だ」

「そのから招かれた」

ゲンガーの問いに、俺は顎でカゲボウズを指し示しながら答える。

「お前え……」

「ダツテキニイッタンダモン。アイツラモキニイルンジャナイカナ」
「話は纏まったか？」

ゲンガーとカゲボウズの会話に、俺はさつさと横槍を入れた。こんな所で仲良くお喋りしているところを見物するような趣味は、俺には無い。

「へっ、入っちゃまったモンは仕方が無い。来な」

カゲボウズから視線を逸らし、ゲンガーが俺にそう告げて来る。

案内役交代らしい。

背後で例の鉄門が軋みながら閉じる中、ゲンガーに付いて俺は邸宅の木で造られたベランダへと上がった。だが、流石はゲンガー。入り口に付いている木製のドアを完全に無視し、すり抜けて中へと消えて行く。

他人の事を考えない奴だな。俺にはそんな芸当無理だと言うのに。仕方が無いので自分でドアノブを掴んだ俺は、そのまま軋むドアを力任せに開いた。金属の擦れる音が混じる。どこかが歪んでいるのか動作が一々重い。更に蝶番に油は全く注して無いらしい。これじゃ気安く開かんじゃないか。ちゃんと管理しろよ。

自分だけ入った後、同じく力任せにドアを閉じると、俺はやっと邸宅のエントランスに目をやる。この時、一瞬カゲボウズを外に締め出したが、どうせ奴もゴースト。すぐにドアをすり抜けて入って来た。

小さなホール状のエントランスには、ガラス製の小型シャンデリ

アがぶら下がっていた。その上では太く短い蠟燭が一本灯されており、灯る薄紫色の炎が辺りを照らす唯一の光源となっている。

その、薄暗いエントランスホールをゲンガーに付いて抜けると、すぐに正面に食堂が見えて来る。外装の石造りと違って床も天井も木製のそこには、同じく木製のテーブル、そしてクッション備え付けの椅子が八脚ほど置いてある。更に、壁には風景画や最早誰だか判らない人物画、そしてこの邸宅の外見等が額縁に入れて飾っていた。

エントランスホールよりも大型で光量も大きいシャンデリアに照らされるそれらを見渡すと、あちこち色褪せてはいるが、外装と比べると痛みも少ない。何とも良い雰囲気の出てる場所では無いか。ひっそり暮らすには最高だ。やっぱりこの邸宅気に入った。

そう思いつつ、俺が食堂に入ったその次の瞬間だった。そこから僅か一秒足らずの間に、四つの動作がほぼ同時に起こった。

まず初めに、今まで後ろを付いて来ていたカゲボウズが急に壁を抜けて俺の左隣にやって来た。次に、俺を先導していたゲンガーが何故かさつと右に飛び退く。さらに、カゲボウズが俺の横腹目掛けて突進し、俺を食堂入口ドア前から弾き飛ばす。そして最後に、僅かに遅れてテーブルの下から目に見えない何かが飛んで来て、たつた今まで俺が居た空間を切り裂いた。実体が無く目に見えない空気の刃。俗にエアスラッシュと呼ばれるものだ。

激しく床に叩き付けられそうになった俺は、必死でブレーキを掛けて停止。だが、何かが起きた事、そして攻撃されたい事は理解出来ても、これが一体どういう流れなのかさっぱり判らなかった。

しかし、部屋の隅、床付近で困惑する俺を尻目に、俺の目の前をカゲボウズが背を向けて塞ぎ、何処かに向かって言葉を発した。

「ボクノオキニイリダカラヤメテクレナイ？」

「ふふふふふ」

カゲボウズの言葉に答えたのは、ゲンガーの声では無かった。

「へっ、運のいい奴め」

残念そうなゲンガーの悪態の後、テーブルの下の暗がりから何かが音も無く出て来る。何かと思えば、床から微妙に浮遊したかなり古びたオンボロ扇風機だった。

「ふひひひっ」

扇風機が自立行動とは。誰かのサイコキネシスによる悪戯かとも思うが、そんな気配は感じられない。

となると、これもポケモンか。まあ、今時土偶どころかゴミ袋が歩き回っているような時代らしいので、いつ何時何がポケモンになってもさして驚く気は無い。どんな新種ポケモンが発見されようと、既に俺には関係の無い話だ。特に興味も無いし。

「なんだあ、レヴィーのお気に入りだったのかー」

扇風機が嗤いながらそう言い、そして全身をカタカタと揺らした。直後、扇風機から橙の影がふわりと抜け出し、宙へと浮かぶ。それと同時に、扇風機がバランスを崩して倒れ、頭部がガチャンという音と共に床に叩き付けられた。

どうやら扇風機ポケモンというわけではなく、これまた別のゴーストポケモンが取り憑いていただけのようだ。確か、ロトムとか言われていただろうか。ポルターガイストの代名詞とされる傍迷惑な奴である。

「エディン、ホノリウスヤメリーハドコ？」

「知らない」

エディンと呼ばれたロトムは、そう言いながら早々にどこか壁の中へと消えて行く。俺はどうやら悪戯の対象に過ぎず、大して興味が無いらしい。

まあ、普通はそうだろう。そう思えば、このカゲボウズはまさか庇ってくれるとは。変な奴だ。こんな奴に遇ったのはいつ以来だろうか。一先ずぶっ飛ばされずに済んだ事は喜んでもこう。

「スコーパー、シラナイ？」

「さあな。へっ」

詰まらなそうに投げやりな答えを返し、ゲンガーもまた天井の中

へと消えて行く。まさか俺に天井の中にまで付いて来いと言っているわけではあるまい。案内は此処で終了だろう。となると、この食堂に案内された事から考えるに、取り敢えず此処で待ってるという事か。

俺は取り敢えずカゲボウズの後ろから離れると、テーブルを囲む椅子の一つを引き、席に着いた。ギシギシ鳴っているが、壊れそうでは無い。

「シーリング、キイテル？ コンナノツレキタヨ」

と、カゲボウズがふわふわと上昇していき、天井からぶら下がっていたシャンデリアに話し掛けた。

そう思いきや、シャンデリアは風も無いのに独りでに体を揺らしながら回転し、カゲボウズへと向き直る。てっきりシャンデリアかと思いきや、あれもポケモンだったようだ。シャンデリアに似てる容姿のためにシャンデラと呼ばれる奴だ。

それはさておき。こんな、と紹介されるとは。なんか少し傷付いたぞ。いや、まだ名乗って無いから紹介のしようが無いのだろうけども。

「解ってる。ホノリウスに訊いてくれ」

「ソノホノリウスハドコ？」

「最上階じゃないかな？ 相変わらず見ないよ」

「マタヒキコモツテルノ？」

「さあ？」

会話を聞く限り、どうもこの邸宅の実権を握っているのはホノリウス、とか言う奴らしい。誰かは知らないが、この時点で既に、俺は薄々此処が人の物で無い事は想像出来ていた。カゲボウズ、ゲンガー、ロトムにシャンデラ。これだけ揃えば、ここが人の住まう家ではなく、アパートメント形式のゴーストマンションだという事ぐらい察知出来る。早い話が幽霊邸宅だ。

ここの持ち主が誰か皆目見当も付かないが、そいつは相当なアホなのだろう。こんなに素敵な邸宅を、教会まで付いた豪華な土地を、

荒れ果てさせてしまうとは。俺が持ち主ならポケモンを警備兵代わりに住まわせる事は検討するが、ポケモン住宅にはしないだろう。使用人を雇ってでも手入れし続ける。いや、人間は信頼出来ない。やっぱり自分で手入れしたほうがいいか。

ふと部屋の中を見回すと、さっきは気付かなかったが、テーブルの上に誰かが突っ伏している。茶色い体に、頭上には天使を思わせる三日月状の輪っか。手は爪状で、見た目はほぼ虫だ。

「ナカノゾクトカエツテコレナクナルヨ」

興味本位で近付こうとした俺は、頭上からのレヴィルの忠告でピタリと動きを止めた。そう言えば、ゴーストタイプのポケモンには大抵、してはならない禁忌がある。この虫ポケモン、又ケニンの場合は背中を覗いただけでアウトだったな。危ない危ない。

「部外者が来ても寝たままなんてね。ロヴァンは相変わらず図太いな」

確かに。俺なら部外者が入ってきたら絶対警戒するだろう。だがさっき少し騒ぎになったにも拘らずこうしていると言う事は、それだけ安心しきっているのか、それとも同居してる連中を信頼してるのか。そんな仲間を持つているとは実に羨ましい限りだ。ただ、一度寝ると起きれない性質なだけかも知れないが。

「シーリング、とか言ったな」

俺はロヴァンから目を逸らし、天井のシャンデラに話し掛けた。

例えば、照明器具だと思ったシャンデリアが実はこいつだった以上、この部屋には一切灯りの類が存在しない。俺も大概夜目が利く性質なのだが、流石はゴーストと言うべきか。

「何か？」

「この家、持ち主は？ 元は人間のだろう？」

此処がゴーストマンションだと推測してから、ずっと気になっていた疑問。それが、これだった。

荒れている以上、もう随分と本来の持ち主から干渉はされていないのだろうが、一応参考程度には訊いておきたい。

「ああ。持ち主ね。そいつなら——」

ところが、シーリングの返事は肝心なところが聴こえなかった。唐突にどこから鐘の音が響き、声を掻き消したのだ。何とタイミ
ングの悪い事か。誰か図つたな。恨んでやる。

そう思いながら、鐘の音が聞こえて来た方角を睨んでいると、再びカゲボウズが近くに寄って来た。あんまり良く知らない相手にすぐ近くに寄られるのは抵抗があるのだが、まあ、さっきの件もあるし、コイツはいいと言う事にしておこう。昔の俺なら剣を振り回していたかも知れないが、今は多少落ち着いた自覚がある。

「三時か——」

シーリングが、俺と同じく音の聞こえて来た方角に視線をやっ
てそう呟いた。

「これ時報なのか？」

「そうだよ。時計塔で三時間毎にバシリカが鳴らしてるんだ」

なんか、また別の名前が出て来た。一体、此処には何体のポケモンが住んで居るんだか。まあ、ゴーストマンションだ。住人はそれなりに居るのだろう。さっきのシーリングの物言いからいって、此処は既に人の手を離れた物件のようだし。おっと、人ではないのだから住居者、と言い換えた方が良いか。

「ま、ゆっくりしていけば？　ただ、何にも無いけどね」

天井で揺れながら、シーリングが後を続けた。これは、好き勝手に動き回っても構わないと解釈してもいいんだろうか。まあ、マズければ誰か止めるだろう。

俺は、シャンデラの言葉を自由行動許可だと解釈すると、そのまま食堂を後にした。後ろからは、相変わらずカゲボウズが付いて来る。こうして誰かが後ろをついて来るのは、昔を思い出す。さっきは庇ってくれた分多少は信頼してもよさそうだし、何だかんだで悪い気はしないもんだ。

エントランスホールを逆戻りし、入った時同様ドアを力付くで押しあけると、そのまま邸宅の外に出る。再び月光の下へと出た俺は、

まず手始めに教会を見て回る事にした。

塀を超えて教会の敷地へと入ると、まず最初に目についたのは建物周辺に散在する墓石だった。後先考えずに死者を埋めたのか、整列すらしていない墓は、薄汚れ、殆ど字も読めず、なお且つ長い年月によって既に傾いている。

挙句、普通は墓石前に死者を埋めるものだが、地面は雑草に覆われていて何処に埋めてあるのか皆目見当すらつかない。恐らく、まともな墓守によって管理された事が無いのだろう。酷い有様だった。放置されてた墓の主どもは、この現状をどう思っているのだろう。見捨てられて恨んでいるのか、それとも孤独を愉しんでいるのか。それとも、取り巻き連中が居なくなつて寂しがっているのか。いずれにしろ、結局最期逝く時は、どんな生を歩んでいても独りだ。誰も冥界に付いて来てはくれない。

所詮は生者など、儚いもの。必死で足掻いても、最後はこうなるものなのだ。俺を土地争奪レースから退場させやがったあの糞っ垂れも、今頃どこかでこんな様になっているに違いない。なんとかして奴には借りを返したいところだが、この先多分遇う事は無いだろう。万が一遇つたらタダじゃおかないが。

「ハイライナイノ？」

後ろからレヴィルに話し掛けられる。

墓を見て独り感慨に耽る俺の思考内容など、ポケモンには理解不能だろう。もつとややこしい世界で生きてるんでね、人間ってのはややこしく無い分生きる事自体が大変そうだが、その分お気楽そうで羨ましいものだ。

「いや。何でも。さて、入るか」

閉ざされた教会の入り口をこれまた力付くで押し開け、俺は教会へと足を踏み入れた。塗装の剥げた椅子が並び、高い天井付近の薄汚れたステンドグラスから差し込む月光が床をぼんやり照らしている。柱の燭台に火の気は無く、また天井を見ても、今度はシャンデ

リアは無い。ここにはシャンデラやランプラーは居ないらしい。

カトリックと思われる装飾だけは立派なこの教会の奥には、これまた立派なパイプオルガンが設置してある。さぞ高価で学術的価値もあるのだろうそれも、やはり人に見棄てられ古びた代償として、塗装がはげ、所々歪んでいるのが窺えた。また、アリアドスかデンチュラ辺りに蜘蛛の巣を張り巡らされた形跡もあり、御世辞にも立派だとは言えない。

無情なものだ。学術品も、手入れしなければただのガラクタになる。皆が必死で揃えた高級品も、こうして見ればただ大きな置物だ。ま、俺から総てを奪いやがった事に関する恨みは忘れる気は無いから、例え無価値になっても取り戻せるなら取り戻したいが。

「次いくか、次」

カゲボウズを連れ、俺は教会を後にした。

茨の垣根を越え、次に邸宅の丁度真西側へとやって来た。そこには、何やら小さな小屋が一つ建っている。窓も無く、天窓も無く、外見からして中は入っても真っ暗闇必至だろうと想像出来る。

「ソコ、マジナイノヤカタ。ハイルノ？」

俺が小屋のドアノブに手を掛けようとした時、カゲボウズが後ろから話し掛けてきた。

マジナイ？ ああ、呪いの事か。他人を祟ったり、殺したり。はたまた護身として使ったり、最悪意中の相手とくっ付いたりする呪いまで存在したな。そんなもの、本家であるゴーストポケモンに任せたり権力に物を言わせたりすればいとも簡単に実現するものだろうに。

昔は藁にも縋る思いでそれに頼った事もあったが、今思えば全く理解不能だ。そんな事する位ならあの当時からゲンガー一匹ぐらい手懐けておくべきだった。呪い殺したい相手なら腐る程居る。わざわざ獲物探しなくて済む分ゲンガーも飛び付いて来るだろう。

ま、何か掘り出し物があるかも知れない。入ってみるだけ入ってみよう。

「ああ、入る」

「ボクたち二ハキツイトオモウヨ」

「上等」

今更何を怖がる必要がある。昔は全部危険な仕事は召使いに丸投げしていたが、今はそんな身分も、今一信用ならない召使いを雇う財産も無い。折角不本意ながらも何のしがらみも無くなってしまったのだ。自分の好奇心ぐらい自分で満たさないと。

中に入ると、やっぱり真っ暗闇だった。夜目が利くようになっておかげでそれでも大体見えるが、一昔前の俺じゃ何に突っ込むか分からないな。

ツン、と鼻を衝く何かのお香の臭いに、殆ど薄れてはいるが漂っていたらしい死臭。鼻が利く奴にとっては、鼻が曲がる程の環境に違いがない。ふと後ろを見れば、カゲボウズも気分悪そうな顔で浮かんでいる。

「大丈夫かお前」

「コノニオイ、キブンガワルイ」

ゴーストたるレヴィルが死臭に弱いわけが無いので、恐らくお香が臭いのだろう。

「キミハダイジョウブナノ？」

「確かにちと臭いが、大丈夫だな」

「ツヨインダネ」

褒められてしまった。

人から褒められたのがいつ以来だったか思い起こし、若干いい気になった俺は、取り敢えず近くのタルに手を伸ばし、中を開けてみる事にした。

中にあつたのは、何やら紋様の彫られたショートボウと、同じような矢のセットだった。なんでタルになおしてあるのかは知らないが、こりゃそこそ値打ちもんになるんじゃないだろうか。

残念ながら、家紋とも見えるそれがどこの家を示しているのか分からなかったが、古い名家のシロモノならコレクターが高く買つて

くれるだろう。いつの時代にも、散財して訳の解らない物を集める変人は居るものだ。特に、大富豪に。

と、中にあった矢の一本を手にとった時だった。何かが、屋根を小突く音がした。それは、あつという間に回数を増し、やがてザーつという音と共に激しく叩きまくるようになる。どうやら、雨らしい。おかしいな。さつきまで満月がきれいに見えた晴天の筈だったのだが。

「ショウシュウダ」

「招集？」

「ソウ」

ふと見ると、レヴィルがドアに半分身体をめり込ませながら外を見ていた。俺が訊き返すと、背中越しに肯定の返事が返って来る。

俺の声、聞こえたのか。というか、顔が完全にドアの向こうなのに返事できるとは。やはりカゲボウズは不思議な奴だ。

それはそうと、招集とはどういう意味だろう。何か知ってるようだが。

「どういう事だ？」

「メリーガエモノミツケタンダ。ホノリウスモデテクルトオモウヨ。コノアメ、バシリカノアマゴイダカラ」

バシリカ。さつき聞いた名前だな。確か時計塔に居るんだったか。そう言えば、さつき折角教会に寄ったにも拘らず時計塔上らなかったな。うっかりしていた。それに、天候が急に変わった事もこれで説明が付く。

「ボクモイカナキヤ。キミモクル？」

何をするのか知らないが、獲物と口走った事を考えると、食事でも確保するんだろうか。ゴーストが何を喰うのか知らないが。

部外者の俺を巻き込む気なのかとも思うが、どうせ暇だ。誰も居ない邸宅で独りぼっちの御留守番というのも、今更子供じやあるまいししたくない。手伝える事があれば、手伝ってやるか。雨に濡れるけど。今更風邪を気にするような体質でも無いし、そこは目を瞑

ってやるう。

ホノリウスだのメリーだのが来るのなら、面会もしておきたい。他の連中の俺への反応は悪かった気もするが、殺されただけはしないだろうと踏んで。

「ああ。手伝うぜ」

レヴィルの言葉に返事した俺は、ドアを開け、雨の降る中へと飛び出していった。

先程と一転し、空には分厚い雲が掛かっていた。勿論、月は見えず、月光の大半もまた地表へは届かない。野外の光量は比べ物にならない程弱くなり、夜に強い者で無ければろくに何も見えないであろう。その中でただ邸宅の窓から漏れる灯りだけが、不気味に暗闇に浮かび上がっていた。

成る程、月光の殆ど遮られた夜間、それもただでさえ視界の悪くなる雨天か。まさにゴーストポケモンのホームグラウンドに敵を引き摺りこむいい戦法だと言えるだろう。環境は有利。面白くなりそうだ。

俺はレヴィルに付いて邸宅の表側に回り込み、状況把握の為にそこで取り敢えず待機する事にした。

雷鳴轟く空からは、絶え間無く雫が降り注ぐ。ベランダの暗がりではひっそりと待っているにも拘らず、跳ね返った雫が体を濡らしてくる。雨乞いした奴はかなり強力な力を持っているようだ。

ふと、俺は敷地の外、森の中から爆発音が轟いた事に気付いた。ほぼ同時に、内臓を揺さぶるような地響きが俺やレヴィルを襲う。それは、少しの間をおいてもう一回起こり、また、森の中からヤミカラスやゴルバットが飛び立つのがうっすらと見える。誰かが戦っているようだ。

ここで、俺の視界の中で今までで最大の動きが起こる。俺が此処に来た時を最後に閉め切られていたはずの邸宅正面の鉄門が、独りで大きく開かれたのだ。誰かが、遠くからサイコキネシスで開け

たらしい。かなりの力を持つ者が、俺等の他にまだこの敷地内で待機しているようだ。

暫く傍観していると、俺は戦っていると思われる騒動が、着実にこちらに近付いて来ていることにも気付いた。殆ど道無き道の先にあるこの邸宅なのだが、戦ってる連中はちゃんとここに追い込めているらしい。

「ソロソロデバンカナ？ ツイテキテ」

レヴィルがそう呟き、そのまま雨の中へと出ていく。その後を追った俺は、すぐに開かれた鉄門のすぐ横の塀の影へと身を潜めた。それにしても、俺を使う事はさておき、よく作戦を考えてあるじゃないか。それに加え、此処に追い込む外の連中のチームワークに、雨を降らしたり、門を開けたり、待ち伏せたりという役目がある程の豊富な仲間。相互に信頼してるからこそできる事だ。余程こいつ等は仲が良いらしい。

思えば、食堂で俺がエディンと言うロトムに襲われた時もそうだ。俺は待ち伏せされてたんじゃなかるうか。幸いレヴィルに助けられたが、庇ってくれなきゃ俺はとくに死んでたんだろう。ただの悪戯にしては、エアスラッシュは酷過ぎる。

ああ、羨ましい連中め。連携が上手い奴等程強い団体は居ない。能無しの召使いや、自分の利権しか頭にない馬鹿共しか部下に居なかったかつての俺とは大違いだ。こんな連中を引き連れて、さぞホノリウスとか言う奴は動き易い事だろう。

いや、ひよつとしたら腕っ節が良いのかも知れない。一癖も二癖もありそうなゴースト軍団の大ボスだ。ある種のカリスマが無いと付いて来ないだろう。となると才能持ちか。いいねえ、元から他の連中より何か秀でた才能持つてる奴つてのは。その才能、そっくりそのまま奪いたいものだ。

「ふふふふふふふ」

と、ここで門の外からエディンが嗤いながら敷地の中へと戻って来る。そのまま、一直線に館の中へと消えていったアイツを見送り、

俺達は、尚の事堀の影に身を潜めた。

戦いの音が、ピタリと止む。相変わらず雨が降り注いでいるため雨乞いした奴は無事なのだろうが、ひよっとして負けたんじゃあるまいな。

「おい、大丈夫なのか？」

「ウン。ジュンチョウダヨ」

小声でレヴィルに話し掛けるも、返って来た答えは順調。よくは解らないが、上手くいつているならそれでいい。こんな所まで出て来て、出番が来る前に作戦自体破綻しました、じゃあ話にならない。数分の後、相変わらず雨に打たれるしか無かった俺の視界が再び動きを取り戻す。門の外から、生きてる人間がマグライト片手に敷地の中に走り込んで来たのだ。勿論、びしょ濡れで。

年齢は三十代から四十代の男で、茶髪。軽装で長袖長ズボンの動き易そうな服を着ており、そこそこ体力はありそうだ。此処の連中が狙ってるのは、コイツに違いない。ただ気掛かりなのは、ザングースにストライクを引き連れている事だが。

「アイツ等、撒いたよな？」

「見えない」

男の呼び掛けに、ザングースが答える。やはり、この暗さは奴等にとつては大きな障害らしい。夜目が利かないのにこんな所まで御愁傷様。仲良さそうに相棒と逃避行は楽しいですか？

「とにかく、朝までなんとか凌ぐぞ」

そう言い、男は邸宅のベランダに駆け上がると、俺がしたようにガタ付いたドアを力付くで開け、ストライク達を連れて中へと入っていった。さっきエディンがその中入って行ったんだけどなあ。それにシーリングも食堂でぶら下がっているはずなんだが。

まあ、こうして中に入って貰うのが作戦なんだろう。こいつ等のレヴィルも特に慌てた様子も無いし、順調と解釈して良さそうだ。

俺は、レヴィルが顔を上げるのを待って同じく暗がりから半身だけ姿を出すと、邸宅を見上げた。たった今まで点いていた窓から漏

れていた灯りは総て消え、また空で鳴り響いていた雷鳴も何時の間にか途絶えている。ただ雨に打たれ、暗闇に溶け込みそうな姿をひっそりと曝しているだけだ。

こりや不気味だ。幽霊屋敷にはもってこいだな。俺は、レヴィルと共に暗がりから完全に姿を曝すと、邸宅へと近付いた。

この時、後ろでじわじわと鉄門が閉まり始め、軋む音になるべく押さえながらこの敷地からの唯一の出口が閉ざされた。もうこの状況では、出入り出来るのは物をすり抜けられるゴースト達か飛べる鳥達だけだろう。もう袋の鼠。自分達のフィールドに見事に誘い込んだわけだ。

「へっ、上手くいったか？」

「イッタヨ」

「なんか連れてるね。友達？」

「ウン」

何時の間にか、後ろに影が二つ忍び寄っていた。

片方は、さつきも見たゲンガー、スコーピー。だがもう一方は、これが初対面だった。

「誰？」

「メリーダヨ」

ゲンガーの隣に浮かぶその姿は、種族名だけは知っている。確か、ムウマージと呼ばれる奴だ。これがメリーか。

さつき、レヴィルがエディンにホノリウスと並んでメリーの居場所を訊いていた。ひよつとしたら、ここの副ボスかも知れない。挨拶ぐらいちゃんとしておこう。

「お初にお目に掛かります」

「ふーん」

だが、メリーは俺への興味は大して無いらしい。解釈に苦しむ返事を残し、早々にスコーピーに目配せする。

「へっ、邪魔すんじゃねえぞ」

スコーピーもこの言葉を残し、メリーと共に館の中へと消えてい

く。勿論、壁をすり抜けて。

「ボクたちモイクヨ」

「ああ」

続くレヴィルの言葉に、メリー達を見送った俺はそう返事を返す。ところが、俺が動き出そうとしたその時、後ろにどうもまだ何かが居るような気がした。だが、たった今後ろは見たはずだ。だからこそスコピーやメリーが居た事に気付いた。これ以上、他に誰か居るのか。

俺は後ろを振り返り、そして一瞬唖然とした。

閉じられた鉄門の前に、やたらとデカいのが何時の間にか鎮座していた。青つぽく、また身長割に体躯が太い。地面から僅かに浮いており足は無く、頭頂部にはひっかけるためと思われる孔が開いている。確かコイツの名は、ドータクンとか言っただろうか。図体のでかさから言って動きも鈍く、こんな短時間の間に気付かれもせず此処まで忍び寄るような真似のできるポケモンではなかったはずだ。

「何だコイツ、何時の間に来た」

「アア、バシリカキテタノ」

だが、驚く俺とは裏腹に、レヴィルは至極冷静だった。

バシリカ。確か今まで聞いた話によると、教会の時計塔で三時間毎に時報を鳴らし、なお且つこの雨を降らせた張本人だったか。ということは、こいつも一応味方なのか。タイプがゴーストじゃないけど。

「こいつ、移動はどうやってるんだ？」

「ウーン、ヨクシライケド、イセカイトノスキマヲトッテルツテホノリウスガイッテタ」

異世界との隙間。これまた俺には理解不能な芸当が出来る奴が居たものだ。なんだ、此処は異能力者の巣窟か。それとも本当は誰でもそんな力を持つてるが此処の連中は特にそれを活用できているのか。後者であると思いたい。何れにしろ実に羨ましい限りだ。

まあ、こうしてバシリカが門の前で待機してくれるなら、万一気付かれても足止めは出来るわけだ。あの重そうな鉄の門を容易く開けられるかどうかは別として、簡単に門に辿り着かれるのを防ぐ為の最終防衛ラインは確保してあると言う事になる。

ところで、俺がこうして無駄な時間を浪費してしまったにも拘わらず、邸宅が静かなのは何故だろうか。スコピーやメリーはとっくに中に入っていた。エディンやシーリングにいたってはあの男が入る前から邸宅の中に居た。既に中で出くわしていても可笑しくないのだが。

「なあ、なんでドンパチ始まらないんだ？ 中であいつら何やってる？」

「シーリングタチガイツラノイノチモヤシテルンダヨ」

そう言えば、シャンデラとかその系統の連中は、相手の生命力を削るようなえげつない真似が出来るとい話だったな。その能力を、最大限に使っているのか。

全く、都合のいい能力を持った奴等がよくもまあこんなに揃ったものだ。それとも、ホノリウスやメリーがあちこちから引き抜いて来たのか。いや、やっぱりホノリウス達の噂を聞いてあちこちから集まって来たのか。多分、両方だ。集めたし、集まったんだろう。まあいい。どっちだろうとどうでもいい話だ。その人材収集能力は妬ましいけど。

俺はレヴィルへと視線を移すと、「で」と話し掛けた。

「俺等も待機か？ それとも何か別の仕事あるのか？」

「タイキダネ」

俺達はドータクンのバシリカに背を向けると、そのまま闇に同化する不気味な邸宅の中へと戻っていった。とはいえ、相変わらず暗い邸宅の中も、敵対する奴が居ると明確に解っている場合はそこまですで怖くないものだ。なるべく暗がりを選びこそそと移動した俺達は、そのまま食堂近くの部屋へと潜む。

雨が降るといふ合図を受け、シーリングも移動したのだろう。食

堂に、シーリングによる灯りは点いていなかった。その代わり、俺達が潜んだ部屋に、動く蠟燭が居た。

無論、ポケモンだ。種族名、ヒトモシ。シャンドラの進化前。レヴィルによるとパラフィンという名らしいこのヒトモシは、薄気味悪く笑いを噛み殺しながら、頭の炎を不気味に、だが鮮やかに燃え上がらせている。勿論、燃やしている燃料は此処に彷徨い込んだあの男やその手持ち達の生命力だ。

このまま気付かれなければ、そのまま命を燃やし尽くすつもりなのだろう。ゆっくり、じわじわと。時間を掛けて少しずつ。実に悪趣味な方法だ。これは、一種の拷問とも言えるのではないだろうか。相手が弱らされている事に気付いていない、という点が拷問とは大きく違う点だが。何はともあれ、ゴーストラしい戦法ではある。寧ろ、世間一般からのゴーストのイメージに忠実な事やってるのではあるまいか。

——まあ、然うは問屋が卸さないだろう事は、大体警戒してただ。

「敵だあ！」

俺達の潜んでる部屋までよく響く音量で、先程のザンゲースらしき叫び声が聞こえて来た。あらら。誰か知らないけど見付かったのか。何をしてるんだか。ちゃんと隠れとかないと。それとも、誰かの臭いでも嗅ぎつけられたのか。

とにかくそんな事はどうでもいい。これでじっくりゆっくり甚振り殺す当初の計画は破綻した。もう、プランB、全面戦闘で行くしかない。何の為に俺達は此処に潜んでいたのか。恐らく、こう言う時に戦う為だ。となれば、もうこんな部屋に用は無い。

戦い。争い。あらそい。アラソイ。ヤルシカナイ。

俺は、レヴィルと共に部屋を飛び出した。

「囲まれてる！」

廊下に出ると、そこには既に先程見た面々がほぼ勢ぞろいしていた。それどころか寧ろ、見た事無い奴等も集まっているようだった。

俺達の居る廊下には、パラフィンとその仲間なのだろうヒトモシが数体、更にヌケニンのロヴァン。そして、玄関へと通じる通路には、スコーピー、メリー、シーリングの三体が浮いている。敵をエントランスホールに通す気は更々無いようだ。

また、唯一エディンの姿が見えないが、ヒトモシ達が塞ぐ通路の中央で洗濯機が一台、不自然に浮遊している。恐らくこれだろう。扇風機同様取り憑いているのだ。

ところで、食堂から通じる道の内、俺やヒトモシ、エディン達が居る道と、エントランスに通じる道は塞がれている。だが、食堂前の通路のもう一方には、一切誰も居なかった。まるで、逃げ道をわざわざ用意してやっているかのようなだった。とはいえ、それが罠である事は俺でも解る。正直、誘っているのが露骨過ぎる。まあ、露骨すぎる位に解ったとしても、窓が封鎖され、玄関も塞がれてる敵には、逃げ道はそこしか用意されて無いわけだが。

「強行突破だ！」

「させないよ」

通路で周囲を見渡すザングースの後ろに、ストライクの姿が現れる。トレーナーは放置でまず道を切り開こうと言っのたろうか。

だが、強行突破という言葉聞いて、シーリングが一言そう言った。

直後、シーリングの炎が一気に勢いを増し、そしてその足下、暗かったはずの邸宅の“床”から、赤い灯りが漏れだす。一拍置いて今度は床板が“何処か”に吸い込まれ、床だった場所に、何とも得体の知れない光景が広がった。

噴火中の火口とでも言うべき、何かがコポコポと沸き上がるドロドロとした液体。見るからに熱そうなそれがゆっくりと床下を流れているような光景だった。思わず自分の足元を確認したくなるそれだったが、廊下が熱くならない事を考えると熱は発していないらしい。

シーリングめ、この顕界を、何処の世界と繋いだのやら。碌な世

界じゃないのは確かだろう。

「煉獄を泳ぎたいなら話は別だけど」

「くそっ！」

「おい、しっかりしろ！」

と、ここで新たな姿が俺の視界に入ってきた。

ストライク、ザングースの後ろ、食堂から、疲弊したトレーナーを担いでキノガッサが出て来たのだ。

こんな事態になってもまだトレーナーを庇うか。良いねえ。涙がちよよぎれる光景だ。俺には、そんな庇ってくれるような、肝心な時に共に居てくれる奴なんて居なかったというのに。だからこそ、俺は此処まで落ちぶれた。信頼できる部下さえいれば、こうはならなかった。

ああ、妬ましい。羨ましい。そして、こういうのを見ると無性に崩したくなる。俺の眼の前で、そんな、仲良さそうな姿、見せるんじゃない。やねえ。むかつく。ムカツク。ムカツク。ムカツク。バラバラニシテヤル。

「ロヴァンヨリオイシヤ」

この時、レヴィルが小声でそう呟いた。何の話か知らないが、こんな時に飯の感想とは。呑気な奴だ。

「とにかく、逃げるぞ！ 後ろは任せる！」

キノガッサが自分では歩けない様子のトレーナーを担ぎ、全員で用意したただ一本の道へと逃げていく。この数でこの様子だ。向こうに逃げるのは順調そのもの。

後は、恐らくレヴィル達の計画には無いであろう、此処に残って俺達を足止めしよう等という愚かで浅はかな考えの奴等をカタツければいいんだろう。俺等の力で。

「ふふふふふふ」

エディンの笑い声が、通路で乱反射する。ああ、やっぱり居たかエディン。オマエタチノカリ、オレモテツダワセテクレ。

「へっ——逃がすかよ」

スコーピーがそう言いながら敵へと近付き、その瞬間、敵の迎撃を含め、総てのポケモンが一斉に行動を開始する。とは言え、全員が一斉に動き出したら勝負は一瞬で十分だった。

俺達は、泣く子も殺すゴーストだ。どうせシャドークロードの辻斬りだのを使えるんだろ？ 奴を相手に、どうして真つ向から取っ組み合いをしなきゃならないのか。スコーピーが敵に近付いたのは、白兵戦を仕掛けると見せかけるためのただのブラフだった。

怪しい光、黒い眼差し、鬼火に呪い、金縛り。実に幽霊らしい、嫌らしい補助技の数々が一斉に敵へと襲い掛かる。白兵戦で迎え撃とうとした敵に、まして超能力も扱えない敵に、これらを防ぐ術など無い。

敵の反攻なんて、無かった。それどころか、俺の出番すら無かった。

動きを縛り、逃げられなくさせ、正気を失わせ、そして相手の命を強力に削る。さらに全身を鬼火で包み、昔懐かしの火炙りの刑――魔女狩りを再現する。これらをほぼ一瞬でやってのけてしまったのだ。

正気を保ったまま焼かれずに済んだ事は、敵にとってはせめてもの情けだろう。俺達、いや、オレトシテハ、モノタリナカタケドナ。

「頂き！」

敵が既に戦える状態にない事を確認し、スコーピーが、ロヴァンが、メリーが、シーリングが、そしてヒトモシ達が、追撃とはまた別の目的で一斉に敵に飛び掛かる。

その後は、最早、筆紙に尽くし難い。ただ一つ言えるのは、シーリングやヒトモシ達の炎が爆発に似た勢いで鮮やかに燃え盛り、またスコーピーの高笑い、恐らく邸宅中に響いたであろうと言う事だ。

敵を追い、食堂前を後にした俺達の背後に、敵の姿なんて無かった。

そう言えば、結局エディンは攻撃に参加しなかったな。それどころか、今見たら洗濯機も居ない。忽然と何処かに消えてしまった。多分、壁でもすり抜けて回り込んでるんだろう。まだ、敵——いや、獲物は残ってるのだから。

「ヤグサメ、あいつ等は？」

敵を道なりに追っていくと、次のＴ字路で、ふわふわと漂う水色のブルンゲルと合流した。開口一番に呼び掛けたシーリングによると、こいつの名はヤグサメというようだ。

ヤグサメは、シーリングの問いに無言で横を向き、Ｔ字路の先を見つめる。そちらに行ったという事か。

「ふふふふふ」

俺達が道を曲がると、道の先からエディンの笑い声が聞こえてきた。先回りして何かしているらしい。さては、また別の家電に取り憑いているのだろう。

道の先には、地下へと通じる階段があった。成る程、地下に追い込む為、ここでヤグサメが待ち伏せしていたのだろう。それとも、エディンが追い回したのか。とにかく、地下には追い込めたわけだ。もう決着の時だな。地下に逃げ場はあるまい。抜け道でも作られているならどうか分らないが、普通、地下に追い詰めた奴は袋の鼠だ。それに、この邸宅の持ち主は追いかける側のゴースト軍団だ。抜け道があれば、そんな所に誘い込みはしないだろう。

地下に降りると、そこはワイン蔵のようだった。頑丈そうな石の柱が数本立つ、天井の高めな石造りの一間で、そこまで広くは無い。ただ、棚の大半が全壊し、樽も殆ど総て原形を留めていないおかげで、部屋の中はよく見渡せた。遙か昔に床に零れたのだろうワインは既に乾き、床に黒っぽい染みだけを付けて掻き消えている。もう、ワイン特有の匂いすら残って無かった。

床に落ちてるマグライトの他に灯りは無いが、シーリングやパラフィン達が光源代わりになる。視界の確保には困りそうにない。

「エディン、無事か？」

そこに、転がるトレーナーを庇うキノガッサと、対峙するオープンが居た。多少の時間膠着状態のまま睨み合っていたらしく、キノガッサの足元には何度か構えを変えたらしい埃の跡が付いている。

「ふひひっ」

オープンが答えた。大丈夫と解釈していいのだろう。ちゃんと言葉使えばいいのに。

とにかく、これで出口である階段は俺達が塞いだ。また、メリーやシーリング達メンバーも揃っている。シーリングはさっきのように煉獄への入り口を開ける能力を持っている以上、危なくなったら階段をそれで塞げばいい。モウココカラハニゲラレナイ。

「あいつ等……突破されたのか」

キノガッサは、階段からぞろぞろと姿を現した俺達を見て、小さくそう呟き、そして舌打ちをした。更に、オープンから目を離さずに足でトレーナーを蹴り、朦朧としているトレーナーを叩き起こす。「他の連中を出せ」

おやおや。仲間全員放出ですか。そうは言っても、大抵のトレーナーは六匹以上のポケモンを連れ歩く。僅か三匹で終わりじゃ無いとは思っていたが。

とはいえ、これはシーリング達にとっては美味しい話なのではないだろうか。何しろ、餌が勝手に増えるんだから。今更ポケモンを増やしたところで、もうこの状況を打開できるとは思わない。一体何匹に囲まれてるか、解ってるんだろうか。

「全員揃ったな」

だが、トレーナーがボールを引っ掴むよりも先に、また新たな声が場へと参入して来た。

低く、落ち着いた声。俺が聞いた限りでは、この場に居るゴーストの誰よりも冷静そうだ。他の誰とも雰囲気が違う。勿論、俺とも何より、貫禄がある。

「へっ、ホノリウス、遅いぜ」

「だが、予定通りだ」

スコルピーの声に、ホノリウス——壁から姿を現したヨノワールが答える。

これで、敵を完全に包囲した。階段のある壁には俺やレヴィル、シーリング、スコルピー、メリー、ヤグサメ、そしてパラフィン達ヒトモシの群れ。反対側の壁には、今出て来たホノリウス。そして、部屋の中央から若干壁寄りの位置で浮遊するエディン。

さあ、楽しいショーの始まりだ。さっきみたイナ、面白くモ何ともない詰まらない真似ダケはして欲しくないところだ。

ここで、ボールの開閉音が三回響いた。戦いが始まる前に、敵がポケモン召喚を無事に終えれたらしい。とはいえ、それは俺達にとつては、予め敵が誰なのかを把握できるという事でもあり、また伏兵の存在を気にせずに戦えるようになるという意味にもなる。

だが、出て来たメンバーは問題だった。此処に来て、悪タイプが二体——それも、バンギラスにドラピオン。どちらもタイプ相性が悪い上、タチが悪い。残りの一体、ギギアルはシーリングやエディンが何とかしてくれるとしても、ゴースト技がまともに通る相手が、キノガッサしか居ないとは。

「お前等——任せたぞ」

「いいから休んでろ」

声を絞り出すトレーナーの言葉に、キノガッサが答えた。

アア、ネタマシイ。コンナジヨウキョウデ、マダカバウカ。イマスグソノナカラヒキサイテヤル。

「さあ、霊界への生け贄を捧げる時だ」

ここで、唐突にヨノワールがそう宣誓し、そして両手を大きく広げた。

バンギラスが、キノガッサが警戒する中、このワイン蔵の四方の壁が、そしてたった今俺達が下って来た階段が、ふっと煙の様に掻き消えた。そして気が付くと、霞が充満したような得体の知れない空間の中に、俺達の居るワイン蔵だった床が浮遊している。

これが、霊界か。いや、冥界なのだろうか。ホノリウスが霊界と言ったから霊界でいいのだろう。俺が、かつて危うく追放されかけた場所。生きとし生ける者が存在する顕界と対極の関係にある、非物理の死者の世界。

奴等を、此処から弾き飛ばせば俺等の勝ちなんだろう。逆に、恐らくホノリウスがやられるとアウトだろう。別次元の世界が、そう簡単に繋がったままのわけが無い。ホノリウスの力でトンネルを開けたのだ。その力が弱まれば、トンネルもすぐさま封鎖される。

「さあ、始めよう」

ホノリウスの掛け声を合図に、これまた総てのポケモンが、一斉に行動を開始した。

まず最初に仕掛けたのは、エディンだった。

他の面々が怪しい光や鬼火を撃つよりも早く、オープンが電気を帯びる。だが、開始早々、独りだけ孤立した場所で攻撃を放とうとしたエディンを、相手が見逃すはず無かった。素早くキノガッサが対応し、一気に肉薄する。瞬発力を活かしてトップスピードで敵に突っ込む先制技、マッハパンチだった。

本来ゴーストタイプであるエディンに格闘技は無効なのだが、生憎今エディンはオープンに取り憑いている。エディン本体は霊体でも、今の依り代であるオープンは物質だ。キノガッサの拳がめり込むと共にボゴツという鈍い音が霊界に響き、同時に鉄製のオープンが大きく凹む。これを受けてエディンが怯み、攻撃がキャンセルされてしまう。

駄目だ、援護しようにもエディンと敵の距離が近過ぎる。このまま呪いやシャドーボールを撃ち込んで、奴諸共エディンまで祟ってしまふ。それに、キノガッサと共に動き出したドラピオンとバンギラスの動向にも気を付けなければならない。ゆっくり狙う暇は無かった。

スコーピーとメリーの二連怪しい光を目を閉じて掻い潜ったバン

ガラスは、続くシーリングのエナジーボール、そしてパラフィンの鬼火を、口から吐き出すストーンエッジで纏めて掻き消しながら撃ち返して来た。攻撃が届かないどころか、逆にシーリングが狙われている。

こいつ、鍛えられてやがる。戦い慣れしているようだ。ポケモントレーナーめ、馬鹿みたいに力だけ付けやがって。

また、その間にドラピオンがこちらへと接近を図って来る。ストーンエッジにより散開した俺達を、一人ずつ消そうという腹積もりだろう。そうはさせない。メイドニオチルノハキサマラノホウダ。

俺は、至近距離を通り過ぎたストーンエッジの弾幕に首を引っ込めながら、ドラピオンへの接近を画策した。奴に好き勝手に暴れ回られて堪るか。俺は一度身内を蹂躪され、拳匂味方に見棄てられている。仲間以外が俺の近くに居るのは我慢ならん。タタリコロシテクレル。

しかし、俺が出るよりも先に、ヤグサメがドラピオンの前へと進み出た。そして、牙を剥く相手目掛けて何やら湯気の出ている水を噴き付ける。

咄嗟に伸びたドラピオンの腕によりヤグサメが殴り飛ばされるが、ドラピオン側もダメージは馬鹿にならないようだった。

目を閉じ、目を押さえたドラピオンがたたらを踏み、俺達のすぐ近くで致命的な隙を見せる。刹那、何とかバランスを立て直すヤグサメの横をすり抜け、ロヴァンが爪を振り被ってドラピオンへと迫った。

両手を振りかざし、敵の顔面に素早く何度も爪を振り降ろす。情け容赦も遠慮も無い、連続攻撃。体勢の立て直しを終え、不機嫌そうな表情のヤグサメもロヴァンに続いたし、こちらはもう大丈夫だろう。

問題は、スコーピー、メリー、シーリング、パラフィン達の相手を一手に引き受けて暴れているバンギラスだ。そして、さつきから目立った行動をしていないギギギアルの動向も気になる。

だが、ギギギアルがトレーナー監視役を引き受けているなら、今の内にバンギラスを殺らなければ。奴まで参戦して来たら、数の有利が引つ繰り返されかけている俺達が不利だ。

「レヴィル、何とかしてあのデカブツを殺るぞ」

「ドウヤツテ？」

「奴を呪う。その間俺の身体を頼む」

昔と比べ、俺も随分攻撃的になったものだ。あんな奴を相手に攻撃する気になるとは。それもこれも、自分で身を護らなきゃ生きていけない状況に追い込んでくれたクズ共のせいだ。

ああ、思い出すだけでもサツイガワイテクル。いつか絶対墓を暴いて、未来永劫俺の悪夢を見ながらモダエサセテヤル。

「ワカツタ」

何故か眼が光を帯びるレヴィルの答えを聞くと、俺は交戦するシリリング達から距離を置いた場所へと移動し、バンギラスへと視線をやった。

必要なのは、殺意と恨み。そして、何より敵が悶え苦しむ姿を愉しむ爽快感。この残虐な笑みこそが、至高の力。呪文のような古臭い物は要らない。ただ敵の死のみを願う負の感情。これこそが、呪いや崇りの強力な動力源となる。

この時、部屋の向こう側から爆発音が聞こえ、大きく弾き飛ばされるキノガッサの姿が見えた。その横には、ボクシングスタイルで宙に浮くホノリウスの姿。ほう、やるな。格闘タイプを殴り飛ばすとは。あれは、多分爆裂パンチだろう。敵からの殴撃は無効だが、格闘タイプを白兵戦でぶつ飛ばすのは至難の業だろうに。

ああ、俺も負けてはいられない。タタリハオレノオハコダ。ノロイハオレノトクギダ。

俺は、物置きを出た時からずっと握り締めていた矢に鏃が付いている事を確かめると、その先端がきちんと尖っている事を確かめた。「アブナイ」

ところが、だった。鏃を確かめる俺を、唐突に誰かが後ろから突

イ。死して尚消えぬ苦しみと恐怖を、その魂にキザミコンデクレル！
「おい、何なんだアイツ」

スコーピーの言葉を背中で聴きながら、俺は、手に持ったまま
った矢を片手に再び体勢を立て直した。

鎌を、自分に向くよう逆手に持ち直す。さらに、その切っ先の味
を軽く舐めて堪能し、そして自分の喉元へと向けた。

ココガ、キサマラノシニバシヨダ。コウエイニオモエ、コノオレ
ガ、ジキジキニロイコロシテヤル。

電気を纏い、動きが鈍いながらもホノリウスと交戦するギギギア
ルを視界の中心に捉えながら、俺は、手に持った鎌を勢いよく自分
の喉に突き立てた。

焼ける様な痛み。飛び散る血。自分でも解る程に溢れ出す力。そ
の力が真つ黒の光となつて傷口から飛び出し、そして素早くギギギ
アルを包み込む。残念だったな、お前はもう終わりだ。それからホ
ノリウス、惜しかったな。ソイツハオレガモラッタ。

くくく。他者を呪い、今の俺より更に悪い状況に追い込む。ああ、
実に感動的だ。嗤いが止まらない。皆纏めて地獄に堕ちる。俺の眼
の前で、情なんてものや、生きてる姿を見せびらかすんじゃねえ。
木っ端微塵にぶつ壊して、ぶつ殺して、その仲を未来永劫ズタズタ
に引き裂いてやる。

わざわざ俺の血を代償に、冥土への橋渡しして誘ってやってるん
だ。大人しく、抵抗せずに悪魔の手元に逝くがいい。この俺の感染
呪術の威力は、俺様自身が保証してやるぜ。

だが、まだ終わって無い。あのギギギアルは、この俺が殺った。
しかしまだ、暴れ回ってるデカブツが居る。あのバンギラス。あ
の目障りな奴さえ殺れば、それで終わりだ。俺の勝ちだ。俺様が完
全勝利する。

ああ、また呪う体力、俺に残ってるかな？ 俺が潰れる前に奴の

死に様が見たい。高笑いしてやる。この俺に逆らうという事が、一体どういう意味なのか。この俺に対して、愚民が愚かにも牙を剥くその意味を、その魂に覚え込ませてやる。悶える。苦しめ。貴様等の断末魔が俺にとって最高の鎮魂歌となる。

うーむ、いや、ちと体力的に厳しいか。仕方が無い。呪いは諦めてやろう。跪いて泣きながら感謝するんだな。まだ方法は残ってるが。

俺は、喉に矢を突き刺したままバンギラスの前へと移動すると、奴が乱発するストーンエッジの前へと立ちはだかった。無論、このままでは俺にストーンエッジが突き刺さるが、それは構わない。寧ろ、突き刺さってくれなければ俺様の術が発動しない。

そのまま両手を広げ、俺は奴を視界の中心に捉えながら総ての力を解放する。途端に、さっき呪いを掛けた時と同じ黒い光が、俺の全身から溢れ出る。この光。この黒い光こそが、俺が操る力。他者を呪い、地獄に、冥界に引き摺り込む最強の力だ。

この俺様が体得した、最高の悪魔の術を披露してやろう。

「俺が倒れる時は、貴様も道連れだ！ フハハハハハハハハハハハハハハ！」

直後、奴のストーンエッジが真正面から俺に突き刺さり、俺の術が発動した。

この術、最大の欠点は本当にうまくいったかどうか、自分じゃよく確認出来ない事なんだよな。実に残念。げ、しかもギギギアルがくたばるところ見てないし。あーあ、なんか醍醐味を、肝心なところを見逃しちゃった。

まあ、いいか。久々の呪いだ。しっかり掛けさせてもらった。これで、こいつ等の命は俺の物だ。

地面に墜落し、視界が、思考がブラックアウトする中。俺の視界

に最後に映ったのは、俺の黒い光に包まれ、膝をつき、前のめりになるバンギラスの姿だった。

ハッハッハ。ザマアみやがれ。この俺に睨まれたのが、運のツキだったな。己の選択を恨むがいい。

さて、しばらく寝るか。

此処は一体何処なのだろう。寝転がって木製の天井を見上げながら、俺はそう思った。

そもそも、俺が今寝ているのは床では無い。何故かもふもふしている。軽く左右に首を巡らせると、何やら毛布らしき物が目に入る。そして頭の下には、枕らしき代物。これは、ベッドか。それも、大きさから言ってキングサイズの。埃だらけでかなり傷んでいるのが玉に瑕だが、元々はそこそこ上物だったのだろう。

こんな所に寝た記憶は無いのだが。と言うか、こうしてまともにベッドに寝転んでいる事自体、何年振りだろう。

ああ、体がだるい。力の殆どを使い果たしているようだ。俺はそんなに暴れたのだろうか。

「起きたか」

ふと、下の方から声が聞こえた。

頭をもたげて足の方を見ると、ベッドの向こう、何も無い空間にホノリウスと、メリー、そしてレヴィルが浮かんでいた。その近くにはこのベッドと同じく古びた埃だらけの机と椅子が置いてあり、その上には、俺がさっき使った矢が置かれている。

自分で寝た記憶が無い以上、俺を此処に寝かせたのはこいつ等か。「手間掛けたな」

「礼には及ばん。それは此方の台詞だ」

ここで、ホノリウスが一旦区切り、そして改めて後を続ける。

「見ていたぞ、お前の力。“呪い”に“道連れ”……全く見事だった」

「そりやどうも」

力を褒められるとは。随分と久し振りだ。いや、下手すると初体験の事かも知れない。御世辞なら言われた事があるが、それはカウントするべきではないだろう。

とは言え、俺にそこその力があるのは、もう仕方の無い事のようにも思える。恐らく、俺はこの館に住む奴の大半よりは年上だ。修羅場を潜った事もある。経験の差があるだろう。

体を起こし、ベッドの上で体を伸ばす。ああ、たまにはこうしないと身体の節々が痛くなるような気がする。

「お前の助けが無ければ、奴を狩り損ねていた」

「そうか？ 俺は、あいつ等に攻撃されたんでやり返したただけだぜ」

「そうか」

ここで、ホノリウスはふわふわと漂いながら、俺が記憶の中で最後に使った矢を手にとった。

「レヴィルから聞いたぞ。お前、難無くこの矢を持ったそうだな？」

「それがどうした？」

「私がこの館を乗っ取った時、最後まで入れなかったのがあの小屋だ。この矢には、破魔の印が彫ってある。その護りを、お前は容易く破った」

どういう事だろうか。つまり、俺が何処かの家紋だと思った物は実は何かの術の紋章、もしくは呪印で、本当は俺は矢を持てる資格を持っていなかった。それを、俺は何も知らずに構わず握り潰したと言っのか。

自分にそこまで力があるとは思わなかったが、もしかしてこの邸宅の中で、俺は現状最強なのだろうか。

「それに、お前は我々とは違う感じがする。お前、元人間だな？」

「ああ、御明答」

「やはりな」

「キミ、ニンゲンダッタノ？ ドオリデキミノココロ、オイシイトオモッタ」

レヴィル、俺の心は喰わないでくれまいか。というより、何故レヴィルがずっと俺に付いて来ていたかやと解った。俺の心が目当てだったのか。

最初にこの館に入る時、突然俺にすり寄って来たのも、隠れていたはずの俺の真後ろにぴったりくっついていたのも、感情の出所を敏感に探知して探しに来ていたからか。来賓気分でホイホイ付いて行ってしまったが、ただの餌扱いだったのね。何と言うか、シヨックである。

ま、それなりに愉しめたので別に今となってはどうでもいい事でもあるが。

「一応、素性を聞いておこう」

ホノリウスが再度話し掛けて来る。俺は思考を中断し、昔の事を思い起こした。

「素性、ねえ」

あんまりいい人生は送って無かったんだが。

「俺は、本名はアルノーってんだ。これでもちよつとした貴族で、大昔に此处から西の方で地主やってたんだぜ。ま、ちっちゃかったけど。ただ、隣国の糞っ垂れに土地を狙われてからは、戦闘に負けるわ、部下に裏切り者が出るわ、散々な人生だった」

ここで俺は一息ついた。

落ち付け、俺。此处で暴れても奴等が見付かるわけじゃない。今は疲れてんだ。無闇やたらに何かに呪いを掛ける余裕は無い。

「忘れもしねえ。いきなりカタパルトなんざ引っぱり出して来やがって。宣戦布告も無しにぶっ放して来やがった。んで、無能な部下は何一つ出来ないわ、土地は奪われるわ、酷いザマだった。あの時から今ぐらい呪う力があればな。敵諸共役立たずの石潰し連中を皆

殺しにしてたところなんだが。しかも、拳句の果て、俺の補佐が裏切りやがった」

レヴィルの眼が、僅かに光を帯びる。また感情を喰われてるようだ。

「俺の飯に、毒入れやがったんだ。まだ討ち死になら、俺も貴族としての体面保てたのによ、数時間転げ回った拳句の御陀仏だ。フザけた真似しやがって。奴のせいで俺は、無様な死に様曝す破目になった。俺が死ぬ時の奴の顔、忘れた事あねえぜ。ヘラヘラ薄ら嗤いしやがってあの糞野郎！」

もう、何年、いや、何十年、いや、何百年も前の話だ。既に奴も死んでいるのは解っている。だが、使い物にならなくなった自分の肉体を棄て、わざわざ墓から脱出する程のこの恨みを俺が忘れると思ったら大間違いだ。いつか奴の魂を見付け出して、散々呪って祟った拳句に地獄の底に突き墮としてやる。そしてあわよくば、そいつの血筋総てを皆殺しにしてやる。誰一人生かしてはおかない。

それから、奴の墓を呪って、奴の先祖まで総てを祟ってやる。末代先まで、一族揃って仲良く地獄で家族団欒を楽しませなきゃ気が済まない。

俺が語気を荒げて言い切るまでの間、ホノリウスも、メリーも、そしてレヴィルも、黙って聞いていてくれた。とはいえ、触らぬ神に祟り無しだ。俺の恨みの念を感じ取って、妨害しない方がいいと察したのかも知れないが。

「お前の目的は解った。しかし、行く当てはあるのか？」

俺が話を区切ってから数秒の後。もう話が終わったと察したホノリウスが、再度問いかけて来る。

「いいや。第一、とつくの昔に死んだ人間の魂が何処うつっているかなんて分かりっこねえ。藁の山から裁縫針を探すような真似してるのは自分で良く解ってる」

それでもなお敵をしつこく探してる辺り、俺の恨みの深さを推し量ってくればいいのだが。この俺を孤独な独り身に陥れやがった

あの馬鹿は、何が何でも崇つてやる。

「現状も把握した」

「ホノリウス、どうする気だい？」

何かを確認するような問い掛けを繰り返すホノリウスに、メリーが問う。何かを企んでいるようだが、何をする気なのやら。

此処はどう見てもあの戦場となったワイン蔵とは場所が違つ。こんな場所は知らないの、俺が事切れてる間に誰かに担がれたのだろう。となると、既に冥界への境界も閉じた後だろうし、俺を冥界に追放する気なら幾らでもチャンスはあつた。まさか攻撃だけはされないだろう。

「単刀直入に問おう。お前、此処に残る気は無いか？」

「は？」

「お前のその呪いの力は、我々から見ても強力だ。このまま帰らせてしまふのも惜しい」

まさかの、スカウトだった。

「何処に居るか見当もつかない相手を探すなら、彷徨うも、待ち伏せするも大した違いは無い。それに此処なら、我々のネットワークを使う事も出来る。情報も集まるだろう」

悪くは無い話だった。当ても無く独り旅するぐらいなら、自ら動かずとも情報源となり得るネットワークを持てる此処に残るのは有力な選択肢だ。生前の姿と名前しか解らないのにどうやってあの糞野郎を探して貰うのかは甚だ疑問だが、そこはおいおい考えていけばいい。

それよりも、俺は、まさかのスカウトされたという方が驚きだった。

生前、俺はただの屑扱いをされてきたし、周囲の能無し共を信頼して無かつたので常に一人だった。おかげで、無能な部下には仕事一つ任せられない、戦争には負ける、拳句本来腹心の部下であるベキ奴からは毒殺されるような散々な生活を送つて来た。

それは、死んで今の状態になつた後も同じだ。大昔の死人の俺に

顔見知りなんているわけ無く、またそう簡単に作れるわけも無く、独りで放浪し続けて来たただけだ。

怨念の対象を探して、あちらこちらで呪いを掛けて回っていた俺に、まさか声を掛ける奴がいるとは。いや、仲間になれと誘う奴がいるとは思わなかった。

「ゴーストタイプの集合住宅、か。俺にはうつてつけの住処だな」

「その代わり、我々の仕事も手伝ってもらう事にはなるが、な」

「ああ、まだ具体的な内容を訊いてなかったな」

ま、タダじゃ住めないだろうとは予想が付く。これ程の邸宅を陣取って、十体以上のポケモンが共同生活してるんだ。それ相応に何かあるんだろうとは察せる。

「——そうだな」

ホノリウスは矢を再びテーブルに戻すと、俺へと再度向き直った。

「我々の仕事は、霊界からの指示を基に、指定された奴を“無事に”霊界に送る事。元人間のお前に解り易い言葉で言えば、死神の役割だな」

随分と物騒な話だ。ようは殺しが仕事なわけか。

まあ、そうじゃなければ、俺のような殺気ムンムン呪い大好き野郎はスカウトしないだろうが。

「へえ。て事は、この家の連中は皆お前の部下か」

「いや、あくまで協力関係だ。仕事以外の私用な狩りにも協力する約束でな」

「ほお」

協力関係、か。その割にはホノリウスがいかにボスっぽく振る舞っていたが。

「バシリカだけは特別だがな。あいつは雨乞い役として人に必要とされなくなった代わりに、人を誘き寄せる為に必要とした我々の側についた、という経緯だ」

必要とされる側に付く、か。まさかポケモンでそんな考え方をしている奴がいるとは思わなかったが、なるほど、面白い。実に妥当

な考えだ。まあ、誰にも必要とされないよりは誰かに必要とされる方が存在意義という物がある分マシだ。あのドータクンも、それが理由で此処に住んでいるのだろう。

俺としては、目的があるのでそれだけでここに居座るわけにはいかないが、ホノリウスが実力を買ってくれている事は素直に喜んでおきたい。長年独り身で実力の評価なんてされた事が無い俺にとっては、褒められた上に仲間に誘われる等耳を疑うような申し出だ。此処に住む連中は皆能力的に非常に個性的なのが揃っているため、本格的に共闘関係になれば、何か面白い事になるかも知れない。

それに、提示された条件も悪くない。当ても無く彷徨っていただけのこの俺に情報源を提供してくれる上、寢床にも困らないのだ。毎日寝る場所や雨宿りする場所を探さなくてもよくなったところかじつとしてるだけで情報が舞い込んで来るかも知れないというのは、俺にとつては諸手を上げて喜ぶべき利点だとも言える。しかも俺に求められた条件は、長年使う内にし慣れた呪いと道連れの技術ただ一つ。自傷を必要とするために朝飯前とは言えないが、かなり楽だと言える。

「それで、返事を聴こう」

ホノリウスが、返事を催促してくる。だが、もう答えは決まっているようなものだった。

「俺を誘うとはな」

俺は、零れる笑みを抑えられなかった。

「仮面に取り憑いて、まさかこんな日が来るとは思わなかったぜ。良いだろう。その誘い、乗った」

死ぬまで落ち付ける場所を見出せなかった俺が、死んでから身を置く場所を見付けるとは。世の中、奇妙なものだ。どこでどう流れが変わるか分からない。

「交渉成立だね」

俺の返事を聞いて、メリーが纏めた。これで、ホノリウス、そしてメリーからの許可は取った。今から晴れて、この俺もこの邸宅に

所属する身になったわけだ。

「キミモスムンダネ。コレカラヨロシク」

改めて、レヴィルが話し掛けて来る。

「ああ。ただ、あんまり心喰うなよ」

「エー、ガイナインダカライイジャン」

心を喰われても害が無いとは知らなかった。まあ、俄かには信じ難いが、レヴィルが言うのだから間違い無いのだろう。幾らなんでも、俺の眼の前で、そしてたった今俺と交渉を成立させたホノリウスの傍で大嘘はつくまい。

それに、ずっと張り付かれていた割に、俺の感情の起伏は何時も通り激しかった気もするし。

「じゃあ、デスマス君。君の部屋を用意するよ」

ここで、メリーが話に割り込んで来る。ほう、俺の部屋か。いや、それはいいとしても。

「ちよつと待った。俺はアルノーだ。別にアルだとかその辺の渾名付けるのはそちの勝手だけどな、種族名で呼ぶのは止めてくれ。もう飽きてるんだ」

「……わかった」

メリーは、俺の言葉に一言そう返事すると、そのまま背を向けて部屋の入り口、木製の傷んだドアの方へとふわふわ去っていく。俺がマスクのせいでゴースト特有のすり抜けという技術が使えない事を考慮してくれたのだろう。

全く、不便なものだ。天井や床をすり抜けて移動するこいつ等に合わせるには、俺は階段を必死で上下する必要がある。楽でいいねえ、特に装備品の無い普通のゴーストってのは。

俺は、フンと鼻を鳴らすと、メリーに少々遅れて部屋を出た。相変わらずついて来るレヴィルは、まあ、良いだろう。

感情目当てだろうがなんだろうが、俺はこいつに誘われたおかげで此処に入った。庇ってもらった。生前死後合わせて初めてと言っている体験だ。コイツにこうして後ろを付いて来られるのも、そ

う悪い気分じゃない。

やっと、気が置けない奴を見付けた気がする。能無しじゃなく、力のある奴でつるめるコミュニティに所属出来る事も確定したし、長らくの一人身の旅も、これで卒業。

随分と長く掛かったが、これでようやく、俺の生活も楽しいものになりそうだ。死亡を挟んでの、第二、いや、第三の人生——いや、俺はもう人じゃ無いからポケ生か——の始まり。

バシリカが鳴らす六時の時報の鐘の音を聞きながら、俺は天井越しに明朝の空へと想いを馳せた。

新たな環境での、零からのリスタートだ。

人から見棄てられ忘れ去られた、古びた一軒の邸宅。そこは、ゴーストポケモンが管理する、一度入ったが最後の霊界への入り口だった。

見棄てられた者達の意志を代弁する、ゴースト軍団による生者への復讐処刑場。その、恨みの吹き溜まりとも言えるこのゴーストマンションに、今日、ひっそりと新入りが加入した。

果たして、新生したこのゴーストマンションは次に誰をいざなうのか。人知れずひっそりと、明日もまた、血と怨恨の歴史が紡がれていく。

（後書き）

作中登場者紹介

アルノー

長年欧州を放浪していた旅の方。主人公。

レヴィル

カゲボウス。好奇心が強い、感情“嫉妬”と“怨恨”の化身。

スコーパー

ゲンガー。人当たりが悪く言葉も暴力的な影の化身。

エディン

ロトム。超常現象ポルターガイストの代名詞。

シーリング

シャンデラ。照明器具に擬態する鬼火を操る業火の化身。

ロヴァン

ヌケニン。進化の際に脱ぎ捨てられた抜け殻のなれの果て。

メリー

ムウマージ。落ち着き払った、感情“恐怖”の化身。

バシリカ

ドータクン。悠久の歴史と共に忘れ去られた水神様。

パラフィン

ヒトモシ。紫色に鮮やかに燃え滾る不思議な蠟燭。

ヤグサメ

ブルンゲル（♂）。仲間を求める孤独の存在。

ホノリウス

ヨノワール。威厳とカリスマ溢れる死の化身。

ポケモンは、歴代図鑑をよく読むと意外と怖い事が書いてあるものだ。

それをそのまま設定として適用すれば、子供向けと思われるポケモンが題材でもダーク・ファンタジーぐらいは書ける。

暗い雰囲気醸しつつ、一風変わったシニカルな主人公がコミカルに紡ぐホラー小説。

楽しんで頂けたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7234w/>

Midnight Mansion

2011年9月16日03時31分発行